

# トポスにおける発達

## 第 2 回

無 藤 隆

トポス（場所）における発達という見方は、保育にあつては幼稚園という環境を分析することである。様々な角度から分析は可能だが、その一つに、園環境を物理的な配置との関連でとらえるものがある。建築学的な立場からの分析があるわけだが、我々も幼稚園を訪問しての印象からそのあり様を子どもからの関わり方としてとらえたことがある（無藤他『園は子どもの宇宙である』ミネルヴァ書房近刊）。本稿では、その本でのまとめを発展させる形で、とくに子どもの空間的な動きに注目して分析したい。子どもの物理的動きがトポスをどのように分節するのか、またトポスでのどのような動きを促すかによって物理的環境がいかに構成されるべきかである。

### 子どもの遊び環境

建築家の仙田満氏は長年の子どものための遊び環境の設計の経験から、子どもが生き生きと活動する

環境の持つべき条件として次のようにまとめている  
(仙田満『子どもと遊び―環境建築家の眼』岩波新書、一九九二、P.117)。

- (1) 循環機能があること
- (2) その循環(道)が、安全で変化に富んでいること
- (3) その中にシンボル性の高い、空間、場があること
- (4) その循環に「めまい」を体験できる部分があること
- (5) 近道(ショートサーキット)ができること
- (6) 循環した大きな広場、小さな広場等がとりついていること

(7) 全体がポラスな空間(自由に出入りできる穴が沢山開いているということ)で構成されていること

また、そういった理念を生かして設計した園での子どもの動きをこう記述している。「子どもはなぜか、すみっこ、はじっこが好きである。大勢で動きまわっているかと思えば、一人でじっとしていたい時もある。体が入るだけの小さな空間は胎内の記憶

か、子どもにとっては心地よいものである。曲がりくねった廊下、バルコニー、屋根裏、階段、舞台、橋、天窓を作った。

高い所、低い所、狭い所、広い所、明るい所、暗い所、柔らかい所、硬い所、さまざまに相反するところが子どもは好きなのである。従来、死角のない空間を作るというのが保育園の基本であった。この保育園では、死角がたくさんある。子どもたちにとっては保母さんから眼の届かないほうがおもしろい。」(P.96)

ここまで鮮やかに明解にいわれてしまうと、私(無藤)としては後何を足せるのだろうと思わざるを得ない。だがしかし、幼稚園の保育を常々見ている身としては同様の視点であれ、子どもが幼稚園という空間をいかなる形で動きまわるのかを検討したいと思う。それが子どもにとってのトポスを構成する基本となるからである。以下に、子どもの大きな動きという観点から幼稚園の空間を分類し、そ

の環境のありさまを眺めてみたい。

## 子どもの動線

子どもは幼稚園の空間をどのように動き回るのか。その動きの基本は、仙田氏の言うように、循環ということにあるらしい。子どもはゆったり落ち着いて何かしたいこともあるし、動き回りたいこともある。体を動かす際には明確なルールがあるスポーツをするというのがもっと大きな年齢の子どもの発想だろうが、幼児は必ずしもそうではない。単に走り回り、動き回るのである。また、出発点と終着点と同じである動きを好む。そうすれば、繰り返してきくからであらうか。あるいは、出発点と異なる目的地のイメージを思い浮かべるのが難しいからであらうか。元に戻ると言ってもまったく同じ道をただ逆行するのはつまらない。前進しつつ元に戻りたいのである。絶えず回転したり曲がったりすること、は、体感と視界の変化をもたらし、それも単調な動

きから救ってくれる。

走りながら回ることもあるが、ぶらぶらと回る場合もある。その場合には、周りを見回しながら、何か面白いことがないか探しているようである。「回遊」とでも呼べるようなこの動きは、ぐるぐる回るのが楽しみつつ、やってみることがあれば、それを取り入れたり、加わったりしようとしているのである。幼稚園の自由遊びの時間では、様々な活動が並行している。子どもはその間を動きながら、随時互いに交渉を持ったり、離合集散を繰り返す。回る動きは園環境全体を結び付け、その各々のコーナーでなされている活動の間に結びつきを作り出す。循環にせよ、回遊にせよ、何もない空間をめぐるのではない。均一な陸上のトラックのような場を回るのではなく、コーナーや活動の「島」を次々に渡っていくのである。各々の島の周りの光景もここにある物・人も変化する。思いがけないものに出会う動きである。幼児が十分に空間を表象し、記憶し

きれないことの効用なのであろうか。また、絶えざる活動から短い時間にも各々の島のあり方が変わることも確かである。

回らなくてある場所でじっと活動している場合でも、周りが見えたり、見えなかったり、交渉が可能であったり、断絶したりすることは大事なことだ。

友だちと交流もできるし、遮断して自分達だけで遊べるようにもしたい。視線や交渉もまた子どもの動きとして重要な要素である。例えば、ある時間数名の子どもがごっこ遊びをしているとして、遊びが成り立つためには周りからの邪魔が入っては困る。しかし同時に、そのグループだけ孤立しては、発展の機会を失いやすい。ときどき、外の子どもが仲間に入ってきたり、一時的な仲間（「お客さん」としてお店に買物に来るとか）になったりした方が遊びに変化が出る。うまく行く場合には、ごっこの筋書きが複雑に発展する。飽きてきたときに周りを見回して、そちらに移ることもよくなされる。周り

でやっていることを自分たちの遊びに取り入れ、面白くする場合もあるだろう。

この交流と遮断の関係は、時間のリズムを空間化することでもある。ある時間、一つの遊びに熱中する。その間は、邪魔が入らない方がよい。飽きてきたり停滞したら、外の刺激が必要になる。そこでは、交流が可能でないと困る。その交替は、遊びにより年齢により子どもの個性により異なるが、一つの遊びの多くは一〇～二〇分程度続いて、そこで何か刺激がないと、終わってしまうだろう。別な遊びに移ることになる。刺激が入ってきた場合に、遊びは独自の総合化されたものと発展するだろう。そして再び、自分たちの遊びに集中することになる。

回る場合でも、籠もる場合でも、その最も極端な形が、隠れて出てくるとか、隠れているといった場合だろう。回っていくときに、ある所から次の所に飛び出して変化があり、新たなものが眼に入るところで面白くなる。ある場所で集中するなら、周りか

ら完全に遮断されて隠れる形が最も都合がよい。隠れる場合に、誰からも見られないで視線をも断ち切るのだが、それは、単に集中することを越えて、他者から逃れ、外の環境から離れ、自分たちだけの世界を作る意志であるように見える。世界は今見えている壁なり大型積み木なり机の裏で限られているのである。外のことは忘れてよい。他の人間も自分たちを忘れているかのようだ。幼稚園という集団の場で長く過ごし、遊ぶには、このような隠れる場を必



要とするのだろうか。そこには、隠れてほっとする場合と、自分たちの独自の遊びを発展させ、力を確認したい場合とが含まれている。

隠れて視線を遮るのは逆に、他者を全体として見渡す動きもある。見渡すのに都合のよいのは、滑り台やジャングルジムの上、二階や階段から大勢が遊んでいる要素を見る場合である。しょっちゅうそんなことをするわけではないが、たまにそのように眺めている子どもを見ることがある。眺めないまでも、そのような場所を通る際にちらと眼をやって、降りてから仲間に入ろうと走り寄る場合もある。そうまでしなくても、何となくいろいろな遊びをしているのが眼に入るだろう。そばでやっているのを見て分かるのと違って、全体像の中での動きが分かるのが特徴的だ。

上下の視線の動き自体が不思議さをもたらす。ジャングルジムをほんのわずかがっただけで、随分周りの光景が違って見える。地面にいたときには

友だちの顔しか見えなかったし、誰かがいればその向こう側は見えなかった。その数人だけの範囲であった。それが二段も上がれば、急に庭全体が見渡される。友だちの姿が斜め上から見え、しかも大勢がまとまっている。その向こうには別な友だちや先生が別な遊びをしているのである。

### つなぐ場の意味

回り移動する際に、肝心の遊びをする場所以外にその間をつなぐところがある。多くの場合には単に急いで次の場所に移るだけのことではないが、時にその場所が独自の魅力を持って、そこならではの遊びを誘い出すことがある。遊ぶ場所ではないから、園で遊ぶのを禁止されていたり、移動の邪魔になつて落ち着いて遊べなかったりして、普通は遊んだりはしない。だが、場合によっては、遊んでよかったり、かえって誰も来なかったりするの、自分たちで内緒で遊ぶのに都合がよい。大体は変な形

をしている空間なので、それを利用して違う遊びが出来る。

廊下や階段はそこで遊ぶのは危ないが、それを別とすれば、面白い場所である。廊下は細長い形で、所々に出入りできるようになっている。何かを移動させたり、ものを投げたりすると楽しい。急いで走ったり、すべったりもできる。階段はいちいち段を上がるのは面倒だが、小さい子どもはそこに魅力を感じる。段の登り降りが楽しいのは相当地に小さいうちだけだが、段を利用してじゃんけんなどで遊ぶのは幼児もよくやることだ。踊り場で休んだり、向きを変えたりするのもよい点だ。そういったことと無関係に、ごっこ遊びなどの場に変えている場合もある。

建物をつなぐ回廊や玄関、出入口なども面白い。エアポケットのように誰の注意もいかないうちで、子どもが隠れて何かを出来るところだ。出入りすることで遊びとすることもある。

廊下などつなぐ場合はしばしば展示の場所にもなる。回覧物やニュース、子どもたちの作品の展示である。それを所在なげに見ている子どももいる。展示はもちろん保育室の壁面がそのためにある。安全に支障のない範囲で、出来る限り子どもにとって「濃い」体験を用意することが園環境の基本である。だから、たとえ移動の場に過ぎなくてもそこで見ることの出来るものを置いておくこと、それも随時入れ換えて子どもの注意を常に引きつける努力が必要だ。子どもの自然の動きをいかに意味あるものにするかである（なお、本稿の趣旨から外れるが、子どもの作品をいかに展示するか、高度な文化的な作品をいかに示し日常化するか、その展示の運営にいかにか子どもを巻き込むかは大事な保育のポイントである）。

## 外に広がる空間

園は幼稚園として閉ざされているのではない。通

園や園外保育があるが、それは別な機会に論じるとして、少なくとも園から見える光景がある。日本の庭園の伝統にあるような借景という大げさだが、似たようなことはどの園にもある。

子どもは、窓と塀から外を見ている。そこにきれいな景色が見えることもある。道路を走っている自動車や、線路を走る電車が見えることもある。隣の公園の樹々がそそり立っていることもある。屋上があつて、遠くの景色が見事に見える園もある。遠くに見える高層ビルや山々、近くに自分が住んでいるマンションが見える。そんなことを話している子どもたちを見かけることがある。

外を見ると言えば、何より空が見えるのだ。季節と天候に応じて様々な姿を見せてくれる。その青さ、白い行き過ぎる雲、暗く重い雨雲。もっとも、そこに眼を止めて、意識を向けられる子どもは少ない。子どもにとってあまりに当たり前の背景に過ぎず、気が付きにくい。子どもの視線は下には向く

が、上には向きにくいのだ。地と空を対比できたり、地から空へと伸びるもの（樹や塔など）があると、視線がそれに沿って伸びて行き、それへと広がる。その工夫が園環境の中で必要なのである。

そういった広い光景への関わりのもう一つは風である。風は遠くから吹いてきて、遠くに去る。眼に見えないが、樹々や服をそよがせ、涼しさや寒さをもたらす。人工的な冷暖房に慣れすぎて、風を感じる機会がめつたにない現代では、改めて風への関わりをいかに園の保育の中で取り組むかを考える必要がある。風の強い日に風と遊び、風に畏れを感じる体験が望まれるように思う。

同様に、空とは別に陽の動きを感じとることをいかに考えたらよいか。暖かさや暑さを感じる。影の長さや光の投ずる角度から光の動きを感じる。例えば、一日の光の変化、季節による陽の高さを投ずる光の角度などをどう子どもに実感できるようにするか。科学的理解以前に驚きと興味を持ち、変化に気

づくことが大事なのである。

### 運動、作業、休息する空間

空間のあり方を考えるとき、その空間で主にする活動から分類し、検討できる。その際、少なくとも運動し走る所、跳んだりする所などは独自の空間を必要とする。活動の作業に応じて、例えば、組み立てたり、取り組んだりするには、空間の広さと備品や道具が必要となる。休む場として、おしゃべりしたり、絵本を眺めたり、先生や職員のそばにいたりする所が役立つ。活動からちょっと離れて、ほっとする場である

（お茶の水女子大学）